

第三十六回研究会 (2023.1.21)

帝国都市アウクスブルクのユダヤ共同体に関する予備的考察

渡邊 裕一 (福岡大学人文学部歴史学科)

報告者は、甚野尚志編『疫病・終末・再生——中近世キリスト教世界に学ぶ』(知泉書館、2021年)に、「中世アウクスブルクにおける「大量死」——ペスト被害の通時的考察」という論考を発表した。本書については、本研究所の第三十四回研究会にて、合評会が開催され(2022年3月15日、共催：高等研究所セミナーシリーズ「グローバル・ヒストリー研究の新たな視角」、関哲行氏と鈴木喜晴氏から、詳細かつ貴重なコメントを提示いただいた。とくに拙論については、関氏より、「ペストが「神罰」と認識されたとすれば、「神殺しの民」への反ユダヤ運動の存否は気になるところである。生じなかったとすれば、それはなぜなのか」とのご質問を頂戴した。本報告では、この質問への応答を目指し、帝国都市アウクスブルクのユダヤ共同体に関する予備的考察を行った。

アウクスブルクにおけるユダヤ共同体について考察するさいに重要となるのは、キリスト教徒とユダヤ人の「共同市民制」をめぐる議論である(A.ハーファークンプ、古川誠之訳「中世アッシュケナジム空間におけるキリスト教徒とユダヤ人の「共同市民制」」同著、大貫俊夫ほか編訳『中世共同体論——ヨーロッパ社会の都市・共同体・ユダヤ人』柏書房、2018)。この概念の有効性については議論があるが、本報告にとって重要なのは、「共同市民制」概念の論拠としてアウクスブルクの事例が挙げられている点である。とくに、1298年に都市アウクスブルクとユダヤ人共同体との間で交わされた協約にて、都市が国王の支持のもとユダヤ人を「不当と暴力から」守ることを確約した点、13世紀末からユダヤ人もキリスト教徒の市民と同様に市民帳簿に記載された点、そしてこの慣習が14世紀半ばのポグロムを経てユダヤ人が最終的に追放される1438年まで継続した点などが挙げられる。そこで本報告では、基本文献を手がかりに、ユダヤ人共同体の成立から14世紀半ばのポグロムと共同体再建を挟んで1438年の都市追放までの流れを整理し、アウクスブルク都市史の文脈で上記の事象を再検討することを課題とした。

アウクスブルクにおけるユダヤ人の定住をめぐるのは、国王、司教、都市が織りなす三つ巴の複雑な関係性の中で考察する必要がある。アウクスブルク司教の証書に、おそらくはユダヤ人共同体の集会所を意味する「ユダヤ館」が登場するのは1259年であり、これが司教のインムニテット内に立地していたことから、ユダヤ人の定住は司教座の成長とともに始まったことがわかる。1276年の都市法では、ユダヤ共同体の指導的立場にあったと推察される「ユダヤ長」の存在も確認される。前述のように、1297年にはユダヤ人が市民帳簿に記載される初めての事例が確認でき、1298年には市壁建設をめぐる都市アウクスブルクとユダヤ共同体の協約が結ばれている。ただし、証書の形式は一方的で、内実には市壁建設というコストのかかる事業のためにユダヤ人の資本を利用したに過ぎないという見方も強い。14世紀には、王族や貴族への貸し付けだけではなく、都市アウクスブルクにも資金を提供するなどのユダヤ人による経済活動が多く確認でき、1348年のポグロム前のユダヤ人人口は、全体でおよそ150名程度であったと推察されている。

1348年11月22日、ユダヤ人に対する襲撃が発生し、多くのユダヤ人が命を落とした。この日はユダヤ教徒の安息日であり、襲撃は計画的であったという見方もある。ポグロムについてはさらなる詳細な検討が必要だが、重要なのは、すでに1355年12月には都市が皇帝カール4世からユダヤ人の受入・再定住の認可を得たことである。以前とは異なり、12年という定住期限を課せられてはいたが、その後ユダヤ人共同体は急速に再建していく。史料上では、1361年に「Judengasse」が、1366年に都市中心部に「Judenberg」という地名が登場する。いずれの地区もキリスト教徒の定住が確認されており、ユダヤ人は決してキリスト教徒の居住区から隔離されていたわけではなかったことがわかる。1385年には、合計で200～300名のユダヤ人の存在が推定されるが、14世紀後半からユダヤ人の定住者の数も減少傾向を見せ始める。

1438年、アウクスブルク市参事は、ユダヤ人の追放を決定した。シナゴークや墓地なども差し押さえられ、後日その墓石は市庁舎の建築に再利用されたという。ユダヤ人追放には、バーゼル公会議の開催や全般的な経済危機、またフス戦争などの要因のほか、繰り返して発生するペスト被害によってユダヤ人に対する不満が住民間に広がった点も指摘されている。繰り返す疫病流行とユダヤ人の関連性については、今後のさらなる検討が必要だろう。14世紀半ばのポグロムは確かに大きな転換点ではあるが、13～15世紀を通時的に分析する視点が重要だろう。